

# モスキート

経済学部 現代ビジネス学科 1年 篠塚迅斗

蚊は命の根源、水から生まれる。

不純物で濁り、腐った水から生まれる。その瞬間は何とも美しい。死地からその身を自らの力で這い出るのだから。

そして、人は殺す。チッと、ごみを扱うが如く躊躇いもなく、殺す。

「女たちの帰還だ！ 各々、歓迎しろ！」

リーダーの男が、女たちの帰りを大声で知らせ。間もなく、空気が振動する音が聞こえ、女たちが家に帰つて來た。その数はとても多いが名前持ち全員の名前を僕は知っていた。多くの同胞を目で追い回しすぐに彼女を見つけた。すぐさまかけより声をかける。

「お帰り。今日は一緒に行けなくてごめん。無事で何よりだ。愛しのリアン」

妻のリアンが大きくなつた体を重そうにしながら、よろよろと飛んでくる。吸血を終えたために体の重量が倍に近くなつており、その飛行にはや

や障害になつていた。支えてあげると彼女は微笑みながら頭を擦りつけてきた。大きな瞳が夜空のように深く、そこに映る僕は慈愛の表情をしていた。

リアンはいいのよ、微笑みながら返事を返した。

「ただいま。エス」

エスとは僕の名前だ。名前の由来は分からない。そもそも、蚊の中では名を持つことさえ珍しかった。リアンは元々名は無かつたが、あまりにも僕の名前を羨んでいたため僕が名付けた。それがきっかけで僕らは惹かれあつた。

リアンが吸血に成功したのはこれで八回目。一

度、近所の墓地の花立に卵を産んだので、近々また産むだろう。生物として僕らは模範的だ。蚊という生命を全うしている。

「どうかな、リアン。そろそろ産めそう？」

少しだけリアンは考え込んで、それから自らの腹に目をやつた。

「……もう、一回くらいかな？ あと一回吸えば産めると思う」

実は、蚊の中でも僕らの純愛は珍しく、ほかの蚊たちにはあまりこのことが理解できない。しかし、僕は理解が出来て、彼女は僕に共感した。だから僕らは成り立つている。

「焦らないでゆっくりでいい。僕らの仕事は命を繋ぐことだから。けどね。僕ならまだしも、リアンたち、雌が死んでしまうと命の繋がりはそこで止まつてしまふ。僕はこういう言い方は好きではないけど、リーダーが言つていただろ。産めるだけ産んでから死ね、と」

仲間たちの多くはこの言葉に添つて懸命に、長くはないその命を奉仕し、次なる命を産み落とす。しかし、それはどうなのだろうかと僕は「疑問」に感じた。生まれてから僕の頭では、他の誰にも付属していない力を使つていて。思考といつたそれは生きるのにとても役だつた。効率を極め、優秀な番いも探せる。強いて言う、僕は生物として特別だ。そしてリアンもそうだ。

「うん。それは分かってる。私は、誇り高き一族を繋げる。勿論、そこにはエスがいるの。異端なことだと思うけど、やっぱり私はエスと死ぬまで生きたい……かなあ……なんて」

リアンは好きになつた理由も、ここなのだろうか。

リアンは、そちらの蚊と比べて格段と頭のいい蚊だった。特に、『感情』は頭一つ分、抜き出していた。

同胞と多少頭が違くとも彼女だけは僕を理解してくれる。

「なんて。じゃなくていいよ。今までずっと一緒に生きてきただろ。これからも、ずっとよろしく。リアン。再三言つたけど。愛しているよ。ずっと生きような」

「……うん！」

リアンは首を大きく縦に振つた。僕の思慕は続いた。

長い年月と共にリアンと生きてきた。それは人間には遠く劣る刹那の時間だけど、しっかりと生きてきた。三週間は生きたのだろうか。三週間。人間なら三十年ぐらいだろう。けれど、蚊にとつてはひと月もとても大きい月日だ。毎日、死と隣り合わせに生きている。空を飛べば車に圧殺される。食事をしに、人里に近寄り、人に見つかりでもすれば、すかさず橙色の死がその身に降り注ぐ。

けど、生きてきた。毎日リアンと笑い、怒り、泣き、喜び、悲しみ、愛し、全力で生きてきた。頭を使つた。どうすればリアンと長く生きられるのか。どうや

ら僕らの命は有限でとても進む速度が速い。定義の出来ない幸せを、曖昧な愛を、日々の慈しみを、最大化に努めてきた。子も作つた。僕が今ある幸せを謳歌したら子供にもめいっぱい生きる喜びを伝えようと思う。きっと幸せの系譜は続くことが出来るだろ。教えてやるんだ。愛はあると。愛は伝わると。

雌のリアンは血を吸わなければならない。だからいつも、死が横でそれ違うような世界に駆けていった。雄の僕らはそちらの花の蜜などを吸えば生きていける。だが、雌は卵を産むために血を取りねばならなかつた。出来る限り、僕はリアンと血を取りに行つた。リアンは、おかしいよと苦笑しながらも満更でもなさそうだつた。

僕は今、何を思考しているのだろうか、分からぬ。何故、リアンは死んだのか。何故、人の彼は喜々として、その亡骸を他人に見せ、笑うのか、分からぬ。何故、いや、おそらく今見ていた光景は夢……じゃない。これが現実。分かるんだ。分かつてしまふんだ。

いつもは助かるこの頭も、今は要らなかつた。愛しの人を失う悲しみを分かつてしまうから。いつも思考し、すべてが死に直列してしまつ。

蚊の一生は短い。一ヶ月と一、二週間、そんなものだ。そろそろ、僕もリアンも人生の折り返し地点に着くころ。今日も、リアンと僕の全力の一人が過ぎた。とても残酷な世界だけど、僕は満足だつた。他者に愛され、愛する。苦難は数えられない思考。……悲しみが増す……助からない。手遅れ。会いたい。後悔。弱者。屑。蚊。人間。赤。人。黒。全て。頭の中で映写機のように思い出がコマ送りされる。

リアンが居れば、僕の世界は輝き、充実した。

変わらない。結局行きつくのは不变の残酷。

リアンが死んだ。

僕はしつかりと見た。橙色の物体に挟まれ、吸たばかりの血液を、体を包む真っ赤な毛布を被る。ようやくその身にまき散らしたあと純白の布のようなものに包まれ、ゴミを捨てるための箱に入れられるのを。

蚊の世界は残酷だ。いつだって容易くその首は死神の鎌に刈り取られる。今回はそんな一つが振りかざされただけ。そう強く、必死に自己暗示した。

そんなことでもしていないと、とても耐えられなかつた。

これはしようがない。摂理だ。道理だ。通常でいて平凡。そういうものなのだから。

時間を沢山かけた。何回も思考を重ねた。重ねるごとに合理性とやらが分からなくなつていった。悲しみに暮れて、僕は別の生き方を新しく考えた。

全ては群れのため。

リアンが愛していた僕らの家族。そのため生きよう。家族をリアンと思い守っていく。リアンは死んでしまつた。僕の大切だつた。生きる希望だつた。戻つてこない彼女を思いながら、今日も僕は群れを守る。

最近よく目が霞む。足腰も思うように動かなくなつた。頭はよく冴えているけれどよる年波には勝てない。

群れの副リーダーに支えられながらリアンとの思い出の場所に来た。もはや一人で飛ぶことすらかなわなかつた。思い出の景色も目が霞んでよく見えない。

一か月前は隣にはリアンがいた。手を伸ばせば届いて君を抱きしめることが叶つた。今はもう、届かない。

「リーダー。大丈夫ですか？」

副リーダーが僕に聞く。彼は僕ほどではないが頭のいい蚊だ。リアンが死んだ後に生まれて比較的若いが話し相手として申し分ない。

「少し、過去を思い返してたんだ」

「リーダーの栄光をですか？ あなたは素晴らしい方だ。群れの規模を数倍にし、死ぬ数も減らした。あなたは俺らの誇りだよ！」

リアンが死んだ後、僕はまず群れを大きくした。そのため色々考えて仲間に教えた。狙うべき人間、タイミングまた雄は花の蜜で生きることができるので花の場所を教えた。

群れが大きくなり。皆が笑うようになった。

リアンを失つた悲しみは大きかつたが群れが幸せになれば悲しみは多少薄れてくれる。

「副リーダー。君は幸せか？」

今でこそ幸せを特効薬として選んだが一時期は復讐も考えた。仲間全員で向かえばいくらかは死ぬけど恨みを晴らせると考えた。

「勿論です」

けど、選ばなくて良かった。無駄な不幸を生み出さなくてすんだ。きっと恨みは終わりがない。僕で終わらせてよかつた。きっと僕は幸せのまま死ねる。

「リーダー、そろそろ帰ります」

乾いた音が響いた。同時に横腹を殴るような風圧が飛来し僕は吹き飛ばされる。空中でやつとの事で立て直す。

巨大な影がひとつ。あの日と変わらずまた大切を奪い取つた。僕の、腹心だつた。大きくなつた群れを任せるに値する男だつた。我が子のように大切に長年育て上げた家族だつた。

幸福は、続かない。決して安寧は平等に与えられない。僕の小さな幸せさえも。

身体は衰えている。空中で自分の身体を留めるのも必死で、身体は下降し続ける。

まだ。僕は復讐を、恨みを放棄した。しかしながら死んで僕らを阻害する。生物としてあるべき姿で僕らは必死に生きているだろう。人間が生きていく上で僕ら蚊を殺すのに理由があるのか。考えたくない。

この力は使うと酷く精神に負担がかかる。もういい家に帰ろう。帰れば皆がいる。僕の生きてく希望、幸せがある。さあ帰ろう。

頼れる後継者に支えられた道を、独りで必死になりながら死ぬ氣で翅を動かして帰つた。ひとりの帰路が酷く寂しくて時々振り返つた。

寂しいな。きっと寂しいんだ。僕は、成せない者だつたんだ。僕に随伴してくる現実はなんだろう。侘しい思いはどんどん肥大する。後悔という单語で終わらせたくない一生に抗うことさえ出来ない。沢山生きてきた。沢山頑張つた。

けど後悔してしまう。

誰か、証明してくれ。照らしてくれ。見てくれ……人生を。明るくて幸せで縁に恵まれた爽快凹滑な一生を。

が見えた。誰だ！ 答えてくれ！ 必死に叫びながら動く物を追いかける。しかし、その動く物が僕を見つめた。シューという音と共に放たれた煙に視界は埋まつた。円筒型の金属製の殺虫剤だ。

羽音が夜風に乗っていく。全身が筋肉痛のよう  
に痺れる。ほら、家が見えてきた。楽しくて明る  
い家だ。今日はゆつくり休もう。リーダー補佐に  
は訳を話して明日からまた、頑張ろう。先祖様は  
言っていた。命を繋げていけど。もう一度頑張ろ

「道を……曲がればあつたはずなんだ。はずなんだけどなあ」

煙が辺りを覆っていた。僕らを殺す臭いがする煙だ。地面にたくさんの家族が落ちていた。子に寄り添う母。力のある男。聰明な老人。家族が横たわっている。水たまりで生きてた子も見る影も無かつた。

終わることさえも、憎い  
人間よ人間よ、生きろ。

身体は動かなかつた。下降していく途中、辺りを見回した。静かなものだ、誰も動いていない。地面でみんな揃つていた。目は虚ろでみんな足と手を空に上げていた。たしかに幸せがあつたはずなのに、もう何も無かつた。地面に落ちた時、あ僕は家族みんなと死ぬんだなど確信した。頑張ろう、と思つていた。頑張る目的も無くなつた今は僕の心に菓食う終わりへの確信だけがあつた。近くの仲間の手を握る。強く胸に抱えるが冷たい仲間は動かなかつた。

夏の蚊は滅んで欲しいです。けどあいつらもな  
んやかんやで生きてるんだろうなあつて考えた  
のがこのお話を書いたきっかけです。ちなみに  
このお話内の人間は本当に普通の善良な人たち  
です。実は文化奨励賞のためにこれとは違う小説  
を書いたのですが二万字を越えてしまい削りに  
削つても一万ちょいになってしまったので、全  
く違うこの話を書いたりしたバックストーリー  
もあります(笑)。こんな話を書きましたが自分  
は人間が好きです。皆さん、今日も気張って生  
きていいましょう!

殺虫剤の存在も効用も知っていた。けど仲間に周知はさせていなかつた。怒りやらなんやら自分でも驚くほど膨大な感情が渦巻いている。疲れ切つた身体に鞭を打ち、仲間を捜索した。何処を飛んでも息苦しい。けど一縷の希望にかけ仲間を探した。どうして誰も飛んでないのか、どうして仲間に会えないのか。分かってはいた。考えもした。でも認めたくなかった。一瞬、視界の隅で動く物た。

終わることさえも、憎い  
人間よ人間よ、生きろ。

近くの仲間の手を握る。強く胸に抱えるが冷たい  
仲間は動かなかつた。

夏の蚊は滅んで欲しいです。けどあいつらもな  
んやかんやで生きてるんだろうなあつて考えた  
のがこのお話を書いたきっかけです。ちなみに  
このお話内の人間は本当に普通の善良な人たち  
です。実は文化奨励賞のためにこれとは違う小説  
を書いたのですが二万字を越えてしまい削りに  
削つても一万ちょいになってしまったので、全  
く違うこの話を書いたりしたバックストーリー  
もあります(笑)。こんな話を書きましたが自分  
は人間が好きです。皆さん、今日も気張って生  
きていいましょう!

・制作者より